

## 独立語文と共起する呼びかけ語について

李 紫 娟

### 1. はじめに

言語活動において、呼びかけ語は、独立語文として、あるいは、文の独立語成分として現れる。(1)は独立語文の例、(2)は独立語の例である。

(1) 愛 子：では、室長、乾杯よろしくお願ひします。

鳴 海：{ゆっくりと立って、宇崎に言う} 宇崎さん、やって。

愛 子：えっ!? {手を振りながら} あっ!? い…いや、わたし、そんな…

三 浦：{励ましている顔で} 宇崎さん

愛 子：{三浦の顔を見て、二歩前進んで} では、これからも、末永く、末永く、よろしくお願ひします {ワインを挙げて} 乾杯! (花)

(2) 藤田：西島君、もっと食い込みなさいよ! (泣)

また、独立語文としての呼びかけ語には、例(3)(4)のように、感動詞と共起するものもみられる。

(3) 彼はしばらく黙って食事をしていた。

「なあ、ワタナベ」と食事が終わってから永沢さんは僕に言った。「俺とお前はここを出て十年だか二十年だか経ってからまたどこかで出合いそうな気がするんだ。そして何かのかたちでかわりあいそうな気がするんだ」 (ノ)

(4) 愛子：{三浦のそばまで歩いて、笑いながら} おはよう、三浦君。 (花)

本稿では、例(3)(4)のようなものを「独立語文と共起する呼びかけ語」と見なし、テレビドラマ・映画のセリフ<sup>1</sup>を調査対象として、共起する独立語文の種類、共起する独立語文との位置関係といった観点から、こうした呼びかけ語の機能について分析する。

<sup>1</sup> テレビドラマについては、呼びかけ語の使用された発話を生の音声データとして記録した。音声データとは別に、該当場面のセリフはテキストに書き起こし、場面情報も付記した。そして、映画のシナリオと映画化された小説から、独立語文と共起する呼びかけ語の用例65を収集した。

## 2. 先行研究

呼びかけ語と独立語文の共起を調べるにあたって、まず、独立語文に関する先行研究の記述を見ておきたい。

鈴木（1972：60）では、「つたえる文」、「たずねる文」、「はたらきかける文」から区別される、「陳述的に特殊なタイプ」の文として、

呼びかけの文 おうい。／中村さん！  
受け答えの文 はい。／うん。／いいえ。  
さげびの文 ああ。／ちきしょう！  
あいさつの文 おはよう。／こんにちは。

をあげている。「こうした文は、内部構造の上でも、主語、述語などの文の部分の分化がなく、おおく一単語から成る。いわゆる独立語文である。独立語文には、話し手の態度（陳述的な意味）だけがしめされていて、素材的な内容は表現されていない。（ただし「なかむらさん！」「課長さん！」のようなタイプの呼びかけの場合は、ことばの向けられる人が示されている。）」と述べている。

また、高橋ほか（2005：22）も文のパターンの一つとして、主語と述語の分化のある述語文と区別された主語と述語の分化がない独立語文をあげている。独立語文については、独立語だけ、または規定語をうけた独立語の構文であるとし、次のような例を挙げている。

さげび：ああ。おう。くそっ。  
呼びかけ：おい。もしもし。田中さん。ちょっとそこのお兄さん。  
うけこたえ：はい。ああ。うん。いいえ。えっ。  
あいさつ：こんばんは。ありがとうございます。おめでとう。おはようございます。  
かけごえ・あいず：それ！（いち にの）さん、はい！  
できごとの名詞でできた一語文：火事だ！ あめだ！  
形容詞語幹でできた一語文：あつっ！ おお、さむ！

以上のように、独立語文になる単語は、その多くが感動詞であり、そのほかに、名詞や形容詞語幹がある。呼びかけ語と共起する独立語文も、ほとんどが感動詞である。そこで、本稿では、感動詞と呼びかけ語の共起を考察対象とする。

感動詞を意味・機能的な観点から詳しく分類している研究としては、村木（2012）がある。そこでは、感動詞が次のように分類されている。

I 聞き手の存在を前提としない感動詞

1 (話し手の事態に対する) 感動

1. 1 感覚的な感動

1. 2 感情的な感動

2 (自らの動作の勢いをつけるための) かけごえ

II 聞き手の存在を前提とする感動詞

1 話し手から聞き手への対応

1. 1 (聞き手に対する話し手の) きもちのあらわし

1. 2 (聞き手に対する話し手からの) よびかけ

1. 3 (聞き手に対する話し手からの) はたらきかけ

1. 4 (聞き手に対する話し手からの) あいさつ

2 聞き手からの発話に対する話し手の対応——うけこたえ

2. 1 よびかけに対するうけこたえ

2. 2 はたらきかけに対するうけこたえ

2. 3 といかけに対するうけこたえ

2. 4 のべたてに対するうけこたえ

3 いいよども (間投詞)

村木 (2012 : 353-354)

なお、呼びかけ語自体も感動詞である場合がある。村木 (2012) では、それらは「II 聞き手の存在を前提とする感動詞」の「1. 2 (聞き手に対する話し手からの) よびかけ」として分類されているもののなかにあり、以下のようなものがあると指摘されている。

1) 「おい」「やあ」のように「感動」と共通するもの

2) 「ね (え)」「なあ」のように終助辞と共通するもの

3) 「ほら」「あの (ね) (さ)」のように指示詞に由来するもの

呼びかけ語がどのような感動詞と共起するかということを記述するにあたって、本稿では、この村木 (2012) による感動詞の分類にもとづくことにする。

### 3. 感動詞と呼びかけ語<sup>2</sup>の共起の諸相

前述のように、村木（2012）は、感動詞を大きく「I 聞き手の存在を前提としない感動詞」と「II 聞き手の存在を前提とする感動詞」の二つに分けている。以下では、この順に、感動詞と共起する呼びかけ語の機能について、位置関係にも注目しながら考察していく。

#### I 聞き手の存在を前提としない感動詞

##### 1 (話し手の事態に対する) 話し手の感動

村木（2012）のいう「聞き手の存在としない感動詞——話し手の事態に対する感動」には「感覚的な感動——ため息／さげび／うめき・いたみ／気づき・おどろき」と「感情的な感動——よろこび／かなしみ／うたがい・とまどい／いのり／のろい／決意／」のようなものが含まれる。村木（2012）での分類は「聞き手の存在を前提としない」ことに限定されているものの、今回調査した資料のなかに、呼びかけ語がこのようなタイプの感動詞と共起する例も観察された。例（5）～（7）はそのように思われる例である。

（5）杉山はそのあまりに濃い世界に茫然としていた。

「杉山さんじゃないの」

杉山「あ、たま子先生」

ダンス教室とはいくらか趣を異にしたドレスに身を包んだたま子が立っている。

杉山「こんなところで、どうしたんですか」

たま子「やだ。私、ここでアルバイトしてるのよ。一人もんでしょ、レッスンない日はすることないし、踊らないのも寂しいからここでダンサーしてるの。一人で来たの？」(Shall)

（6）{美奈子の店、賢太郎の同僚たちが賑わっている}

美奈子：{賢太郎が店に入っているところを見て} あっ 賢ちゃん、いらっしゃ… {後ろについている鳴海を見て驚く}

みんな一同：あっ！ {みんなも驚いた}

秦乃：シュンイチ ナルミ！ (花)

（7）{賢太郎は自分の電話で愛子に何回電話を掛けても出ないから、三浦の電話で掛けなおす}

愛子：もしもし、三浦さん？

賢太郎：愛子

<sup>2</sup> 呼びかけ語がほかの独立語と共起する際、全体で一つの文になる場合もありながら、独立語文として、二つの独立語文の並列になる場合もある。したがって、独立語と共起する呼びかけ語自体は独立語であったり、独立語文であったりする。本稿における呼びかけ語が独立語なのか、独立語文なのかを追求するより、共起する独立語との関係に注目し、呼びかけ語の機能をみる。

愛子：あっ、お父さん！？

賢太郎：どうして電話でないんだ？

愛子：忙しくて、気づかなかったの

(花)

以上の(5)～(7)は、いずれも、相手の存在に気づいた瞬間に感動の感動詞を発し、その後に感動した対象を言葉にして発している例である。これらの例は「事態に対する感動」であり、典型的な呼びかけ語とはとはいえない。しかし、相手を指す語を相手に向けて投げかけることから、弱いながらも呼びかけ性が生じていると思われる。なお、今回の調査では、呼びかけ語と「聞き手に対する話し手の感動」との共起は例(5)～(7)のような「感覚的な感動」の場合がほとんどであり、「感情的な感動」の例は見られなかったが、調査の範囲を広げると、「感情的な感動」との共起も十分あり得るであろう。

なお、呼びかけ語がこのタイプの感動詞と共起する際には、基本的にそれに後続する。

## 2 (自らの動作の勢いをつけるための) かけごえ

このタイプの感動詞には、「よっ」「どっこいしょ」「よっこしょ」「うんしょ」などがあるが、呼びかけ語と共起した例は見つからなかった。

## II 聞き手の存在を前提とする感動詞

### 1 話し手から聞き手への対応

#### 1. 1 (聞き手に対する話し手の) 気もちのあらわし

村木(2012)の分類では、「(聞き手に対する話し手の) 気もちのあらわし」には、「いわい」、「はげまし」、「ねぎらい」、「ほり」と「ののしり」が含まれる。今回調べた用例のうちには、「はげまし」との共起しか見られなかった。

呼びかけ語が励ましの感動詞と共起する場合には、それに後続することが多い。

(8) ワルツが終わりに近づき、再び杉山が妻と娘の前を通過しようとしたとき千景が叫んだ。

千景「お父さん！がんばって！」

そして必死に夫を見詰める昌子は、夫の目を捕らえた。 (Shall)

(9) 三浦：泣いている愛子を後ろから愛子を抱きしめる| ドンマイ、宇崎さん。 (花)

(10) 三浦：頑張れ、宇崎さん。 (花)

例(8)は呼びかけ語が励ましの独立語文に先行する例であり、(9)(10)は呼びかけ語が励ましの独立語文に後続する例である。例(8)の呼びかけ語は、相手に声援を送るための呼びかけであり、

(9) (10) の呼びかけ語は、感動詞とともに相手を励ますために用いられている。いずれの場合も、呼びかけ語も感動詞と同じく、励ましの気もちが込められているが、少し離れた場所にいる相手を励ます場合には、前者のように、呼びかけ語は感動詞に先行するといえる。

「いわい」の感動詞には「おめでとう」「はっぴばーすでー」などが、「ねぎらい」の感動詞には「おつかれさま」「御苦労さまでした」などが、「ほこり」の感動詞には「おお」「へへへ」などが、「ののしり」の感動詞には「ええい」「こいつ」「なによ」「ざまあみろよ」「くそー」などがある。これらは今回の用例にはなかったが、「おめでとう」「おつかれさま」の感動詞は、呼びかけ語と共起し得るとおられる。

## 1. 2 (聞き手に対する話し手からの) よびかけ

次は、「(聞き手に対する話し手からの) よびかけ」を表す感動詞が呼びかけ語と共起した例である。

(11) {賢太郎は自分の電話で愛子に何回電話を掛けても出ないから、三浦の電話で掛けなおす}

愛子：もしもし、三浦さん？

賢太郎：愛子

愛子：あっ、お父さん！？

賢太郎：どうして電話でないんだ？

愛子：忙しくて、気づかなかったの

(花)

(12) ……彼女はしばらく黙っていたが、やがて突然体を震わせて泣きはじめた。直子は体をふたつに折って両手の中に顔を埋め、前と同じように息をつまらせながら激しく泣いた。レイコさんがギターを置いてやってきて、直子の背中に手をあててやさしく撫でた。そして直子の肩に手をやると、直子はまるで赤ん坊のように頭をレイコさんの胸に押しつけた。

「ね、ワタナベ君」とレイコさんが僕に言った。「悪いけれど二十分くらいそのへんをぶらぶら散歩してきてくれない。そうすればなんとかなると思うから」

僕は背いて立ちあがり、シャツの上にセーターを着た。「すみません」と僕はレイコさんに言った。

(ノ)

(13) 「そう、昔の私みたいに」とハツミさんはにっこり笑って言った。「でもワタナベ君、貧乏だとかなんだとあって、そんなのあまり関係ないのよ。そりゃクラスに何人かはものすごく気取ったバリバリの子はいるけれど、あとは私たち普通なのよ。お昼には学食で二百五十円のランチ食べて——」

「ねえハツミさん」と僕は口をはさんだ。「僕の学校の学食のランチは、A、B、CとあってAが百二十円でBが百円でCが八十円なんです。……話があうと思いますか？」

(ノ)

「聞き手に対する話し手からのよびかけ」を表す感動詞と呼びかけ語は同じ機能をもつと考えられるが、この場合、呼びかけ語は必ずあとに位置する。その理由は「聞き手に対する話し手からのよびかけ」を表す感動詞と呼びかけ語の呼びかけ機能のレベルが異なるからだと考えられる。

### 1. 3 (聞き手に対する話し手からの) はたらきかけ

「(聞き手に対する話し手からの) はたらきかけ」は、「命令」、「すすめ」、「たしなめ」、「さそいかけ」に分かれる。今回の調査では、「すすめ」を表す感動詞との共起しか見られなかった。

#### (14) たま子「向かい合ってやってみましょう」

杉山とたま子、服部と田中が向き合って立つ。

たま子「ハーフトーンは、必ず男性から始めます。女性は一つ遅れて始めます。男性がやめたら、一つ遅れてやめます。杉山さん、はい」

一同ハーフトーンを始めるが、杉山はどうしても揃える足を間違ってしまう。

たま子「杉山さん、出した足を戻すのよ。 ……………」 (Shall)

#### (15) 愛子：{コンパに来るみんなにワインを注いでから、挨拶の時間になる。ワイングラスを持って、三浦に向かって} 三浦さん、どうぞ (花)

これらの例のように、呼びかけ語が「すすめ」の感動詞と共起するとき、それに先行することが基本的である。そして、この場合の呼びかけ語は、すすめる相手を指定するために用いられている。この働きは、一般的なはたらきかけの文に先行する呼びかけ語と同じであると思われる。

### 1. 4 (聞き手に対する話し手からの) あいさつ

「(聞き手に対する話し手からの) あいさつ」は、まず大きく、「接触」の感動詞と「待遇」の感動詞に分かれ、「接触」の感動詞には「出会いのあいさつ」と「わかれのあいさつ」が含まれ、「待遇」の感動詞には「感謝」と「謝罪」が含まれる。今回の調査では、これらのすべてのタイプの感動詞と共起する例が観察された。

#### 1. 4. 1 接触

まず、「出会いのあいさつ」の感動詞との共起を取り上げる。これには、(16)～(20)のように、呼びかけ語が感動詞に先行する例と後続する例の両方が見られる。

#### (16) {宇崎の家}

愛子：{朝起きた後、キッチンで朝ご飯を作っている父に向かって} お父さん、おはよ

(花)

(17) 朝、出勤途中

立花：朝、出勤途中、角田美樹に気づいて、走って追いかけながら、前で歩いている角田美樹に向かって} 美樹、おっはよ。

(泣)

このように、呼びかけ語があいさつの感動詞に先行するとき、相手が話し手の存在に気づいていない場合がほとんどである。このような場合、話し手はあいさつを言うために呼びかけているのであり、呼びかけ語はあいさつに従属していると思われる。

(18) 朝、会社のビルのロビー

三浦：先輩の安奈に気づいた後、挨拶をする} おはようございます。

安奈：三浦のそばまで歩いて、笑いながら} おはよう、三浦君。

(花)

(19) 朝の事務室

安奈：愛子を見無視して、三浦に向かって} おっはよ、三浦君

(花)

(20) 愛子が初めて出勤する日の朝、会社に向う途中

美奈子：ジョッキングしながら、愛子と賢太郎へ近づく} 朝からテンション高い親子ね 愛子と賢太郎を通りすぎて、走り続ける}

賢太郎：美奈子を見る} おはよう

愛子：笑って美奈子の後ろで走る} 美奈子さん、おはようございます。

(花)

例(18)～(20)は話し手と聞き手は同じ場において、すでにお互いを認知している。このような場合には、(18)(19)のように、呼びかけ語があいさつの感動詞に後続することが多く、あいさつに「親しみ」を込めるようなはたらきをしている。

一方、同じような状況で、(20)のように、呼びかけ語が先行する例もみられる。後続する例が親しみを表現しているとすれば、先行する例は、逆に、「あらたまり」を表現しているように感じられる。

一方、「わかれのあいさつ」の感動詞と共起する場合は、例(21)(22)のように、呼びかけ語が感動詞に後続する例が多い。また、(23)(24)のように、二つの感動詞の間に位置する例もある。しかし、感動詞に先行する例はまれである。

(21) 賢太郎：アハッ…じゃあな、同僚の三浦君。 {三浦の肩を叩く} (花)

(22) 三浦：それじゃ、宇崎さん。 (花)

(23) 仲原：じゃ、きゆうちゃん、また。 (泣)

(24) 金山：じゃ、宇崎、ご機嫌よう。 (花)

(21) (22) のように、呼びかけ語が後続する場合は、出会いのあいさつの場合と同様、親しみの表明であろう。(23) (24) のような例も、親しみが込められていると思われるが、もし相手が目上であればあらたまりのようにも感じられるので、この位置では、親しみもあらたまりもあり得るとしておく。

では、「わかれのあいさつ」の感動詞に呼びかけ語が先行しないのはなぜだろうか。それは、呼びかけ語があいさつの感動詞に後続する場合は、あらたまりの表明であり、あらたまった表現をしないといけない人間関係であれば、「わかれのあいさつ」の感動詞より、「ねぎらい」の感動詞「おつかれさま」「御苦労さまでした」などを使う方が適切だからであろう。

#### 1. 4. 2 待遇

次は、感謝の感動詞と呼びかけ語が共起した例である。呼びかけ語が感動詞に先行する場合もあるし、後続する場合もある。

(25) {会議室で会議が終わった後、角田はテーブルにある資料を整理しているところ、きのう、桐野に助けてもらったことを思い出して、振り返って桐野に向かう}

角田：桐野マネージャー {桐野は視線を資料から角田に移した後} 昨日、ありがとうございます  
泣きました。 (泣)

(26) {努と小滝は外へ出ようとしているところ}

努：{小滝と出ているところ、突然、手を離して愛子に向かって走る}

小滝：{あわてて努を見る} 努！

努：{愛子の前まで走って、愛子に向かって} お姉ちゃん、ありがとう！ (花)

(27) 坂東：よくない体質だよ。こんなに優秀な社員を第一線からはずすなんて、会社は変わらないとなー。 {二人ともしばらく沈黙する} 悔しい思いをしてくただろ。

桐野：いえ。自分の信念を曲げるくらいなら、飛ばされたほうがましだと思ってましたから。

坂東：{下を向いて笑う} ハッハッハッハ {頭をあげる} 桐野らしいな！

桐野：坂東さん。 {礼をしながら} ありがとうございます。

坂東：{桐野のへ向かう} 何だよ？急に。

桐野：わたしが戻ることができたのは 坂東さんのお力添えがあったからです。 (泣)

(28) {会社のロビー、角田は掲示板に貼ってある仲原が転勤になる掲示を見た後、仲原が会社のビルから出ているのを見かけて、呼びとめた後の対話}

角田：くじけそうになったら、思い出します。何事も、一日にして成らずって。

仲原：{角田を見つめる}

角田：{しばらく仲原を見つめる} ありがとう、仲原さん。(泣)

ここでも、(25)～(27)のように、呼びかけ語が先行する場合は、あらたまりを表現している。もっとも、(25)のように、まず相手呼びかけて、お互いに向き合ってから感謝をのべる場合には、必然的に呼びかけ語が先行する。(26)(27)のような例では、相手は目の前にいるので、特に呼びかける必要はないが、あえて誰に感謝しようとしているかを明示することによって、あらたまりのニュアンスが派生するのであろう。

一方、(28)のように、呼びかけ語が後続する例は、感謝の思いの深さを表現しているようである。

呼びかけ語が謝罪の感動詞と共起する場合は、(29)(30)のような呼びかけ語が先行する例が多く見られ、(31)のような後続する例はまれである。

(29) 榎原：室長、申し訳ありません、遅くなって。(花)

(30) 桐野：坂東さん、お待たせしました。(泣)

(31) 賢太郎：おっ、すまないな、同僚の三浦君(花)

(29)(30)のような呼びかけ語が先行する例には「かしこまり」が強く感じ取れる。これらの例で、呼びかけ語と謝罪の感動詞の位置を入れ替えると、自分が悪いことをしたという認識が軽くなったり、馴れ馴れしい態度になったりする。呼びかけ語が後続する(31)には、まさにそのようなニュアンスが感じられるだろう。

## 2 聞き手からの発話に対する話し手の対応——うけこたえ

村木(2012)が「聞き手からの発話に対する話し手の対応——うけこたえ」に分類している感動詞には、「よびかけに対するうけこたえ」「はたらきかけに対するうけこたえ」「といかけに対するうけこたえ」「のべたてに対するうけこたえ」「あいさつに対するうけこたえ」などがあるが、今回の調査では、それらと呼びかけ語が共起した用例はみつからなかった。

## 3 いいよども(間投詞)

村木(2012)が「いいよども」に分類している感動詞には、「あの」「あのう」「ま」「なんか」「ええと」などがあるが、今回の調査では、それらと呼びかけ語が共起した用例はみつからなかった。

## 4. おわりに

以上で村木(2012)による感動詞の分類に基づいて呼びかけ語がどのような感動詞と共起するかに

ついて考察した。考察した結果は以下のようにまとめられる。まず、呼びかけ語と共起する感動詞は大きく「Ⅰ聞き手の存在を前提としない感動詞」の「1（話し手の事態に対する）感動」の「1.1感覚的な感動詞」と「Ⅱ聞き手の存在を前提とする感動詞」の「1話し手から聞き手への対応」が観察された。「感動詞的な独立語文」と共起する際、基本的には村木（2012）に分類された「聞き手の存在を前提とする感動詞」と共起するが、今回「聞き手の存在を前提としない感動詞」も観察された。また、「Ⅰ聞き手の存在を前提としない感動詞」の「1（話し手の事態に対する）感動」の「1.2感情的な感動」と「Ⅱ聞き手の存在を前提とする感動詞」の「2聞き手からの発話に対する話し手の対応——うけこたえ」と「3いいよども」の例は見られなかった。

次に、呼びかけ語は感動詞と共起する際、共起する感動詞に対する位置関係と共起する感動詞の種類によって、その機能は大きく、「よびかけ」と「情意的な側面」の二つに分けられることが明らかになった。具体的に言うと、まず、呼びかけ語は「感覚的な感動」と共起する場合、共起するものに後続し、その機能は「感動」になる。また、呼びかけ語は「話し手から聞き手への対応」の感動詞と共起する場合、基本的には、共起する感動詞の前に位置すると、呼びかけ語の本来のよびかけ機能が前面化し、共起する感動詞の後ろに位置すると、よびかけ機能が後退し、情意的な側面が前面化すると思われる。なお、呼びかけ語は「（聞き手に対する話し手の）よびかけ」の感動詞と共起する際、基本的には、聞き手をさし示す呼びかけ語は、感動詞に後続し、ともに「聞き手へのよびかけ」を表す。また、呼びかけ語が「（聞き手に対する話し手からの）あいさつ」の感動詞に先行する場合、「（聞き手に対する）あらたまり・かしこまり」という情意的な機能も観察され、これは、あいさつや感謝の気持ちが誰に向けられているかを明確にするという意味なら、やはりよびかけの機能が生きていると解釈できると思われる。

そして、呼びかけ語の「情意的な側面」の機能には、「相手に対する話し手の感動」、「相手に対するかしこまり」と「相手に対する親切さ・親しみ」の三つに分かれる。つまり、呼びかけ語が「話し手の感動」の感動詞と共起する場合、呼びかけ語の機能は「相手に対する話し手の感動」になり、「(聞き手に対する話し手の) 気もちのあらわし」、「(聞き手に対する話し手からの)働きかけ」、「(聞き手に対する話し手からの)あいさつ」などの独立語文に先行する場合、「相手に対するかしこまり」の感情的表現になり、後続する場合、「相手に対する親切さ・親しみ」の感情的表現になると思われる。具体的に示すと、以下のようである。

感動詞の分類		位置関係と機能
Ⅰ 聞き手の存在を前提としない感動詞	1 (話し手の事態に対する) 感動	1.1 感覚的な感動 1.2 感情的な感動
	2 (自らの動作の勢いをつけるための) かけごえ	用例なし
Ⅱ 聞き手の存在を前提とする感動詞	1 話し手から聞き手への対応	1. 1 (聞き手に対する話し手の) きもちのあらわし (はげまし)
		1. 2 (聞き手に対する話し手からの) よびかけ
		1. 3 (聞き手に対する話し手からの) はたらきかけ (すすめ)
	1. 4 (聞き手に対する話し手からの) はたらきかけ (あいさつ)	呼→感 (声援) 感→呼 (はげまし) 感→呼 (よびかけ) 呼→感 (すすめる相手の指定) 呼→感 (よびかけ) 感→呼 (親しみ、思いの深さ、なれなれしさ) 呼→感 (あらたまり、かしこまり)
2 聞き手からの発話に対する話し手の対応——うけこたえ		用例なし

今回の調査では、得られた用例が少なく、観察された呼びかけ語と共起する感動詞のタイプのすべてを観察することはできなかった。たとえば、「聞き手からの発話に対する話し手の対応——うけこたえ」の例は観察されなかったが、実際には、呼びかけ語の共起は十分あり得るだろう。また、観察されたタイプの文においても、共起する感動詞との位置関係のすべてのパターンが観察できてはいないかもしれない。これらの問題は今後の課題とする。

### 参考文献

鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房  
 たかき かずひと (2010) 「独立語の特殊性」『国文学 解釈と鑑賞』平成22年7月号、pp.77-86  
 高橋太郎ほか (2005) 『日本語の文法』 ひつじ書房

村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 ひつじ書房

李紫娟 (2012) 「一語文としての呼びかけ語」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 第33号, pp.185-204

李紫娟 (2013) 「呼びかけ一語文におけるイントネーションの型と意味について」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 第35号, pp.147-163

李紫娟 (2014) 「呼びかけ一語文におけるイントネーションの型と意味について (その2) ——受け手的なタイプの場合——」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』 第37号, pp.77-93

#### 用例出典

テレビドラマ：

- ・(花) 『花嫁とパパ』 (フジテレビ2007年6月26日放送終了)
- ・(泣) 『泣かないと決めた日』 (フジテレビ2010年3月16日放送終了)

映画：

- ・(Shall) 『Shall we ダンス? 』 (DVD 発売日2005/04/08角川書店)
- ・(ノ) 『ノルウェイの森』 (DVD 発売日2011/6/22ソニー・ピクチャーズ)

小説：

- ・(ノ) 『ノルウェイの森 上』 (講談社文庫 村上春樹 (著) 2004)
- ・(ノ) 『ノルウェイの森 下』 (講談社文庫 村上春樹 (著) 2004)